

花部英雄著

## 『漂泊する神と人』『昔話と呪歌』

松本 孝三

—

『昔話と呪歌』の「あとがき」のエピソードに登場するからというわけではないだろうが、花部英雄氏の著作二冊についての書評を書くことになった。彼とは三十歳を過ぎてからも知り合であり、それもう二十年を超えた。年齢も近く、ともに学生時代からフィールドを生かした学問をしてきたことから意気投合し今日に至っている。日本の昔話研究を主導してきた柳田国男、関敬吾に続く世代の稻田浩二、大島建彦、野村純一、福田晃といった先達にそれぞれ学生時代から学恩を受けてきたものとして、今は我々の世代の一つの成果として花部氏の二冊の著作の紹介と思うところを述べてみたい。

花部英雄氏の著作二編は平成十六年一月と同十七年三月に相次いで三弥井書店から三昧

井民俗選書として出版された。前者は『漂泊する神と人』、後者が『昔話と呪歌』である。

出版時期がほぼ一年ずれではいるが、内容的にはひと繋ぎのものである。氏自身の言葉によれば、「実は学位論文として一昨年國學院大學（主査野村純一教授、副査倉石忠彦教授、同野本寛一教授）に提出したもので新たに学位を取得することができた。事情で分冊になつたが完結上梓できたのは誠に嬉しい限りである」（『昔話と呪歌』「あとがき」）とある。両書に収録されているものは一部を除きそのほとんどがここ十年のうちに書かれたものようである。ということは、氏が一念発起して高校の専任教員を辞し、不安定な状況の中で研究に専心した時期の作物が大半を占めるということになる。その間の氏の研究に対する姿勢には正に鬼氣迫るものがあつたと後にある人から聞いた。「誠に嬉しい限りである」という氏の言葉には重みがある。欲

を言えば一冊の著作としてまとめて欲しかったと思うが、ともに民間説話を研究してきた同世代の一人としてその成果の刊行は喜びにたえない。加えて平成十六年から晴れて母校である國學院大学の専任講師の職に就かれたことは何にも増して嬉しい出来事であった。花部氏には『西行伝承の世界』（平成八年、岩田書院刊）と、『呪歌と説話—歌・呪い・憑き物の世界』（平成十年、三弥井書店刊）の二冊がすでに世に問われている。特に『西行伝承の世界』は、西行伝承研究の新しい切り口を我々に提示してくれた記念碑的なものであった。今回の二著作はそれらにさらなる業績が重ねられたことになる。

二

まず『漂泊する神と人』について、その目次を示す。

□承と書承のコラボレーションー□承文章における「読む」「聞く」「書く」「話す」の位相

## I 歴史的民間説話

長慶天皇伝説と青森県  
鮑が沈没を防いだ話

## II 伝承的民間説話

地蔵信仰と説話・伝説——「頬焼地蔵」の展開をめぐつて——

西行伝説の担い手

西行と文人趣味——『遊歴雑記』「田畠村西行庵」を中心にして——

青森県脇野沢村の義経伝説

「血の出る木」の象徴的意味

## III 共時的民間説話

白神山地の山人I——農耕・狩猟を巡る話

白神山地の山人II——森林伐採を巡る話

白神山地の山人III——新田開発を巡る話

## IV 俗信的民間説話

憑靈の語り——声と言葉を巡つて——  
憑靈の時空——江藤淳『妻と私』を巡つて——

## III 俗信的民間説話

「なめど」山の熊」と狩猟伝承

次に『昔話と呪歌』の目次を示す。

序 民間説話の分類のための覚書  
I 超通時の民間説話

鳥の昔話と飢饉——「山鳩不孝」を中心にして——

小鍋焼きの地獄——昔話「時鳥と小鍋」の伝承風景——

昔話「孫の生き肝」の生態と歴史

昔話「赤米の悲劇」の解説

昔話「月の兎」考

昔話と伝承者・研究史

伝承者・伝播者

東北の語り婆——『老嫗夜譚』の谷江嫗を中心にして——

昔話研究の現在とこれから

伝承の終焉を迎えた昔話・伝説研究

自らの長いフィールドワークのなかで得られた貴重な口承資料を民俗学的な視野でとらえ

追究する一方で、それに関わるあらゆる古典資料を駆使する。それも単に紹介する程度の

ものではない。伝承性を見極めようとする氏

の鋭い視点によって、伝承地を取り巻く文献と口頭伝承のありようが次第に明らかにされ

てゆくのである。例えば、錦仁氏の『浮遊する小野小町』などは文献伝承の研究方法を示す優れた成果であるといえようが、花部氏の場合には口承文芸の研究にみごとにそれが生かされ、結果として伝承地における民俗文化史としての分析が見事に花開いているといえるのである。次に、主だったものについて紹介してみたいと思う。

「繁次郎話」の成立と伝播  
繁次郎話の伝承者  
ニシンバの笑い  
「繁次郎話」の成立と伝播  
繁次郎話の伝承者  
「なめど」山の熊」と狩猟伝承  
歌と呪歌——「フキフキホグセの説話一件」を巡つて——  
呪歌の生成——人丸「ほのぼのと」  
〔三〕をめぐる呪歌・呪い

さて、両書を通してうかがえる氏の仕事の真骨頂とも言えるものは、その豊富なフィールドワークの経験によって培われた口承文芸の研究であることは当然であるが、それと関連させて文献伝承の世界をも深く涉獵していることであろう。「口承と書承のコラボレーション」が冒頭に書かれた所以である（『漂泊する神と人』）。収録されたどの論文も、氏自身の長いフィールドワークのなかで得られた貴重な口承資料を民俗学的な視野でとらえ追究する一方で、それに関わるあらゆる古典資料を駆使する。それも単に紹介する程度のものではない。伝承性を見極めようとする氏の鋭い視点によって、伝承地を取り巻く文献と口頭伝承のありようが次第に明らかにされ、結果として伝承地における民俗文化史としての分析が見事に花開いているといえるのである。次に、主だったものについて紹介してみたいと思う。

『漂泊する神と人』の「まえがき」で花部氏は、一冊の全体を通じて「漂泊」であることに気が付かされたという。そして、漂泊の形態には「カミを奉じて歩く聖や巫女」の遊行、仏道や技能の深化向上をめざしての修行、新天地や仕事を求める生活者の移動、乞食や慈悲にすがっての流浪、定住を追われた者たちの流離……。があるとする。その指摘はまさしく氏がこれまでの調査と研究を通して追究してきたものであることは疑いない。それはいわゆる「言問いの文学」の視点であろう。鶴見和子氏の『漂泊と定住』を引きつつ、漂泊者をアウトサイダーという視点からではなく、定住者に活力と覚醒を与える存在として取り上げる方法に賛意を表したい。

### 〔I〕歴史的民間説話に分類した「長慶

天皇伝説と青森県」は、まさにそういう漂泊者である長慶天皇伝説に焦点を当て、近代に至つてもなお生成を繰り返す伝説の新しい状況を鋭く抉っている。その背景には戦前の威風発揚といった時代精神の反映があり、そ

の動きの中で敗戦直前までなされた長慶天皇陵墓問題があると指摘する。氏によれば天皇や王子にまつわる天皇伝説には二つの傾向があり、一つは「攻撃的でポジティブな天皇」、

いま一つは「後退する天皇」である。長慶天皇伝説は後者にあたるが、花部氏はそれについて、「天皇伝説には古代以来の神の遊幸（ゆうこう）信仰が核にあり、それがかつて人を神に祀つた場所である塚や墓に結びつく形で伝説の輪郭が形成されていく。その際、靈力を強調する手段として、貴種の頂点に立つ悲劇の歴史的な天皇、王子が持ち出されてくることになる」とし、それは長慶天皇伝説が流離・潜幸を語る遊幸神の信仰に基づくもので、陵墓をめぐる伝説は神を塚墓に祀る信仰に帰着するものだと捉える。いわゆる英雄伝説や史譚とされるものは本質的に流離と悲劇性をその内部に抱え込んでおり、そこにこそ物語性が存在すると思うが、その意味で納得できるものである。

### 〔II〕伝承的民間説話に掲げた五本の論文は、氏によれば「一般的な伝説」である。

「鮑が沈没を防いだ話」「桑名屋徳蔵話と海運」はいずれも海の伝承を取り上げる。前者は、鮑が船底に張り付いて船を沈没から救つたというもので、奇異な話である反面、その形態の特徴からは然もあるかという連

想を人々に抱かせる。そこを話の世界に仕立てたものであるが、花部氏はこの話の歴史化に注目する。すなわち、近世における文献伝承を駆使しながら、鮑の伝承が海に生きる海人の系譜に属し、その伝承がやがて時代を下り、越前の朝倉氏の始祖伝承にまで発展してゆく経過をたどる。氏の文献涉獵とその読み込みに私などはいつも驚きを覚えている。同じく海の伝承を取り上げながらも、後者では江戸時代の船乗りの世界で語り継がれた世間話に焦点を当てる。近世の説話などにも記され、また、歌舞伎の演目にもされて人気を博した船乗り徳蔵の伝承の様子がここでは明らかにされ、かつての日和見、風待ちなどの要港であつた地に徳蔵話が伝承されているという。江戸期の檜垣廻船の歴史を丁寧にたどりながら、船乗りたちによって運ばれた徳蔵話の伝承の道筋をたどった好論といえる。

明らかにしている。西行伝承研究の新たな視点を示唆したものといえよう。

ところで、この「伝承的民間説話」の項に「血の出る木」の象徴的意味と題する論文が掲載されている。初出の際の原題は「赤色の象徴的意味—「赤米の悲劇」「血の出る木」を中心」であった。しかるに、後述の『晋話と呪歌』の「I 超通時の民間説話」の章には「昔話「赤米の悲劇」の解説」が掲載されている。確かに、前者の「赤」は「血の出る木」に展開させるための枕の位置にあるのに対し、後者の方は「昔話と生活」に主眼を置いた位置付けということになるのであろうが、これを「赤」色の象徴する変異・悲劇をめぐる伝承として捉えるならば、両者の分類における差異の意図がやや曖昧になってしまふ気がする。

「III 共時の民間説話」は白神山地をめぐる山人論である。民俗の聞き取りが詳細になされ、その分内容もたいへん面白く、今改めて読んでも読みこたえがあった。氏によれば、山人に対する意識が、農耕民とマタギと称される狩猟に生きる人々においてはまったく違うという。前者は、山人の棲む山中にいて、「豊饒をもたらしてくれる山を神秘と

仰ぎ、信仰・儀礼の対象として畏敬」し、豈作祈願のために登頂するのに対し、後者では「マタギは誰にも見せない」という秘伝の巻物を持つていて、常に山に携帯していく。危険が多い山中を絶大な呪力をを持つ巻物と一緒にすれば随分と安心であろう」と記すように、常に恐怖を抱き、それゆえにその恐怖を克服する手段を講じ、狩猟を妨げる山人を妖怪とみなし、撃退する存在として扱つてきたと指摘する。何度も聞き取り調査を繰り返すことによってしかこのような視点は生まれてこないであろう。「山人を山人史に組み込んで安易に納得する前に、話の機能に応じた変容をしつかりおさえておく必要がある」という氏の言葉には説得力がある。「白神山地の山人」の冒頭で氏は山人論を総括し、柳田国男の山人論を、「個々の資料のもつ背景や陰影を捨象し、山人（＝先住民族）の実在の有無へと、資料の読みをしほつていったように思われる。山人の実態をさまざまな角度からたどりながらも、究極にはその実在を決定づける方向へと資料を偏向させていったのではないか」と鋭く批判する。部氏はすでに柳田を超えているといえよう。

「昔話と呪歌」では「伝承のことば」を通してその背景にあるものを探究しようとする。「I 超通時の民間説話」は五本の論文を収録するが、鳥の話二題は、取り上げる昔話「山鳩不孝」も「時鳥と小鍋」も、いずれも「子ども」と「死」が関わって構成されており、その鳴き声とともに伝承してきた心意を汲み取ろうとする。まさに「伝承のことば」に込められた物語の確認であろう。それは本書での著者の大事な論点でもある。

「孫の生き肝」の生態と歴史」は、今日の言葉には説得力がある。「白神山地の山人」の調査で報告された口承資料「孫の生き肝」を中心には、仏教説話集から説経節などの語り論を総括し、柳田国男の山人論を、「個々の物、近世の淨瑠璃や歌舞伎に及ぶまで、日本文学を多岐にわたって渉獵しその本質を明らかにする。その姿勢は前述のように花部氏の得意とするところである。この話型についていは夙くに南島の豊富な口承資料である「仲順流れ」を網羅し考察を加えた福田晃氏の仕事がある。南島説話の語りの担い手としての念仏者の活動を視野に入れた伝承と伝播の解明であった。それが、さかのほれば古く

は法会や供養の高座における説経僧の唱演にあることを指摘し、その一つとして安居院の唱導書『言泉集』に載る「郭巨」譚があつたとする。氏の論点には「念佛の話」への言及もあり、その意味で、南島の「口承資料を丁寧に見てゆけば、本話型の伝承と伝播にもう少し広がりが見出せるのではないかと思う。

次に昔話と伝承者・研究史として四本掲載されているが、そのうち語り手を中心と伝承と伝播の問題を考察したのが前半の二論文である。主に東日本の語り手に焦点を当ており、東北地方にあまり昔話のフィールド経験のない私などには大変ありがたいものであつた。その中で、特に「昔話の記憶と引き出し」については、例えば氏家千恵氏や黄百合子氏、水野道子氏の論文などを併せて読むことで我々にはさらに語り手についての理解が深まるように思われた。後半の二本は「学界の動向」であるが、その視点は学会全体を見通し、昔話研究の過去・現在・未来を的確にとらえており、いつもその気配りの効いた視点に教えられている。

「II 共時的民間説話」は「江差の繁次郎話」に関するものを三本掲げる。これらは北辺のニシンバを舞台に話されてきた笑話の分

析を試みたものであるが、氏の論文の特徴は「ニシンバの笑い」冒頭においてまず「ニシンバ前史」を掲げる。氏の研究のすぐれている点はこういった昔話の背景をきわめて丁寧に読者に示してくれていることだ。「二二二シンバ空間」においても同様に、かなりの紙面を割いて幕藩体制下のアイヌ人との関わりから説き起こし、それ以降のニシンバの状況を明らかにする。その中で、「安野のいう「戦

いに敗れ、降参した者が相手の下人となる」のがすでにみてきたようにアイヌ人なのであり、それに遅れて「飢饉の年に遠方より食を求めてやって来た『無縁非人』」が和人、および東北の地からの出稼ぎ者ということになると、いつてているのは、安野眞幸氏の『下人論』を見事に敷衍するものであろう。我々も同様のことを見事に敷衍するものであろう。我々も同様のことを配慮しつつ論文を書くことに努めているが、氏の場合はそれが時に饒舌に走ることもないわけではないが、一つの文化史として論文全体に不可欠のものとして機能しているのである。そこには青森県出身の氏が故郷に寄せる愛着すら感じる。それは同じく地方出身である私にも共通の思いである。ところ

「III 俗信的民間説話」に掲げた三本は本書のタイトルを「昔話と呪歌」とするにふさわしい内容のものといえよう。「俗信と呪歌」「フキフキホグセの説話一件」を巡って、冒頭で花部氏は、昔話研究の中で俗信を取り上げることが少なかつたし、また昔話が聞けなくなつてきている現在、相対的に俗信がよく聞かれるともいう。全く同感である。さて、ここでも氏は「フキフキホグセ」の言葉一つから多くの民俗事例を示しながら、系のもつれをほどくという民俗知識の伝達を意図したものではないかという結論を導き出す。そして、野本寛一氏の成果を援用しつつ、そこには同音反復の呪術的效果が働いているとする。呪文とはまさに言霊である。ただ、このフキフキホグセ自体は呪歌ではない。民俗知識としての呪文を話に取り込んだものであろうし、むしろ民俗知識の説明に近いものが

で、繁次郎話の「草履に下駄」は、沖縄本島の「モーイ親方」話にはいくらも聞かれる話

文献を渉猟しつつ呪歌のあり方を探る。この方法はまさしく氏の独壇場であろう。「律語で形が整い、文字で記されることが多く」「硬直なことば」である呪歌が、時代の枠組みの変化の中でも死語とならずに今日まで残されている原理について、それをことばの持つ身體性にあるとする。「伝承のことば」を探究する氏の最も意を尽くすところであろう。

この人丸の「ほのぼのと」歌について、呪的意味の一つとして、「ひとまる」を「火止まる」と解釈し、それが一方では妊娠を類推させるという。火は生命の根源であり、おそらくは忌み火の扱いからの拡大解釈なのであらうが、明石市の月照寺所蔵の「柿本大明神縁起」には人麻呂を安産の神として崇めていられるという。私見で恐縮だが、「火」について考える時、例えば昔話「河童火やろう」など「火」との関わりも考えられる。それは端的に「性」を指すであろう。石川純一郎氏の「河童火やろう」の解説や野村純一氏の「最初に語る昔話」「昔話の三番叟」といった御論攷にもすでにこの「河童火やろう」譚のことは言及されているが、『日本昔話事典』の「河

童火やろう」の項（福田晃氏稿）で、「その始原は、男女の性の交りの物語を語つて、穀物の豊饒を期待した祭の庭の語りごとに求められるものであり、この「河童火やろう」の昔話も、その語りごとの1流と認めうるものであろう」とする。性と豊饒をテーマとする民俗との絡みから「ヒ」の民俗性をもう少し幅広く考えてみてはどうだらう。あるいは小林幸夫氏の言う、「火」の連想に興じたといふ御伽の衆の軽口咄の座（宴の座の俳諧——火の軽口咄——）などともどいかでつながっていらないであろうか。この話には特に「場」の視点が必要と思われる。

最後になるが、二著作における問題点はやはり分類であろう。『昔話と呪歌』の「まえがき」に記すように、氏はわが国の民間説話を民俗学的な方法によつて分析し、新たな概念化を目指して通時の民間説話、共時的民間説話、俗信的民間説話の三分類を提示し、また、「漂泊する神と人」の「まえがき」においてそのことについて解説がなされている。今はそのことに踏み込む余地がなくなつた。思ひ付いた点は前述したが、全体にやや曖昧さは否めないようと思つ。

ところで、本書の価値とは関係ないことで

あるが、校正ミスの多さが気になつた。せつかくの業績がそれで損なわれるわけではないが、一つの作物としての完成度はその校正にも関わつてこよう。惜しまれる。

さて、今回の二著書について私なりに思うことを書いてきたが、謬見もあると思う。お許し願いたい。氏のフィールドワークとしてのあり方は、私がこれまでひそかに学ぼうしてきたところであり、「伝承とは何ぞや」ということを執拗に追究する花部氏の研究者としての姿勢は、我々を含め我々の次の世代に伝えるべき大切な道標となることを確信する。

（漂泊する神と人）三弥井書店、二〇〇四年発行、本体二八〇〇円。『昔話と呪歌』三 弥井書店、二〇〇五年発行、本体二八〇〇円。（まつもと・こうぞう／堺市立工業高等学校）